

卷 頭 言

「八萬四千の法藏は我身一人の日記文書なり」とは、宗祖大師が、學問修行の根本方針を、我等に示し給へる言である、即ち我等が修むる科學、哲學は、科學の爲の科學哲學の爲の哲學ではない、开は自己完成の爲の間接的階段であり、由序である、諸他の文藝も美術も皆同様である。若し然らずとせば、此等は唯だ單の遊戯に過ぎぬ、其處には全く學問の意義も無く、文藝美術の眞の價値も無い。

爰に自己完成とは、第一義的の大人格の築成を意味する、即ち絶對本佛を自身に見出すことであり、永遠無窮の生命を獲得することであり、人生の眞價値を確認することであり、更に全宇宙を眞善美化することである。併し是れは「無而欲有」底の者でなく、全く還元的、本有的のもので、教學上の術語では之を始覺即本覺と稱する。

南無妙法蓮華經とは、この自身に見出す處の絶待本佛の御名である、即ち我等が自己完成の直接的方法としての、信念涵養と行道策進とは、唯此本佛の御名たる南無妙法蓮華經を、心に念し口に唱へ身に行ふの一事に在るのである。外觀には、他佛他法に歸依渴仰するが如くなるも、开は修養の初步に於ける傾向であつて實には自己の本佛を自ら喚び活す所の不可思議の修行法である、「多寶如來の寶塔を供養し給ふかと思へば、左に非ず、吾身を供養するなり」の聖訓は此意に外ならぬ。

所有學問藝術は本佛への間接的道程であり、信念涵養と人格向上とは本佛への直接的階段であらねばならぬ、即ち一切を擧げて南無妙法蓮華經に歸納すべきである、否、深く之を考ふる時は、凡百の云爲行動は、悉く本佛に出發し、本佛に安住し、本佛に歸着する、即ち始中終を通じて、唯だ南無妙法蓮華經である。

若し本佛と云へる中心を失ひ、此に統一せぬならば、必ずや修養も淺薄に流れ、信念も迷妄に墮するであらう、又凡ての學問、藝術も、唯だ一種の骨董で、管に力ある心の糧とならぬのみならず、却て心を傷ぶり

身を亡ぼすの苦具となるであらう。「智者學匠の身となりても、地獄に墮ちて何の詮か有らん」と云ひ、「佛法を學ぶ者却て多く地獄に墮つ」と云へる聖誠は正しく此に在るのである。

學問と宗教とは別個の世界であり、藝術と道德とは各独自の境域を有す、とは、常に聞く處であるが、是の如きは、實に無宗教を以て誇りとし、自己完成に盲目なる、智識偏重、藝術至上を夢みる者の囈語である、此囈語が一段嵩じたのが、某々文士の情死であり、某々博士の獸行ではないか、即ち學問墮獄、藝術亡國を絶叫するの必要がある。

從令學問は宗教に歸趨すべきもの、藝術は道德と一致すべきものと合點しても、其宗教や道德の内容實質が、低級で不完全で、第二次的のものならば是れ亦前者と五十歩百歩である。仍て我等の要求する所は、本佛中心の宗教信仰、之を基礎とせる道德、即ち自己完成に取りて最も力ある所のそれではなくてはならない。

我等は自己完成の爲めに、科學哲學の研究にも、文藝美術の修得にも、努力せねばならぬ、又本佛顯發の爲めに、より高き人格の向上と、より正しき信念の増進に奮勵せねばならぬ、其れが立正大師の門下として、身延在住の學徒としての天分である。(十三年六月念一日)